

新潮文庫

虛空遍歷

下卷

山本周五郎著



新潮社

虚 空 遍 歴
下 卷



定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 草 134 L

昭和四十一年十月三十日 発行
昭和四十四年十月十日 五 刷

著 者 山 本 周 五 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京 都 新宿 区 矢 来 町 七 一
電話 東京 (〇三) 二六〇 一一一
振 替 東 京 八 〇 八 番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

虛 空 遍 歷
下 卷

山本周五郎著



新 潮 社 版

1728

虚空遍歷

下卷

九の一

沖也ちゅうやはあぐらをかいて坐り、手酌あおで呷るあおように飲んでいた。酒を注ぐときはゆっくりと、まるで寸すんを計るはかるように慎重に注ぐが、盃を口へもってゆくと喉へぶつつけるような手つきで、いっぺんに飲みほすのであった。

そこは立慶町の「たちばな」の奥座敷であるが、いまは座敷などというおもむきは見られなかった。隅のほうに二人分の夜具がつくねであるし、盆やけんどんや広蓋ひろふたが勝手なところに置かれ、燗鍋かんなべのかかっている火鉢のまわりには、角樽つのだるや燗徳利や、井、皿、小鉢、めし茶碗から箸はし、めし櫃びんまでがちらかっていた。——これらの中で、沖也は酒を飲み、生田半二郎は小机に向かつて書き物をしていた。二人とも髪はほつれているし、無精髭むじやうひげは伸びたまま、肌着きちやくの衿えりにも垢あかのよぐれが見えた。

二人がこの座敷へこもって七日になる。箕面みのおの事があったあと、並木万吉らが仕返しに来るかもしれないので、九郎右衛門町のほうは暫らく留守にするほうがいい、と生田がすすめ、おけいもそうしてくれとくどいた。そのとき生田は、沖也の新らしい浄瑠璃のことを聞いて、「たちばな」の座敷を借りるついでに、そこで自分が台本を書こうと云いだしたのだ。

——新井泊亭なんぞよりましなものを書いてみせる。

生田はこう云って草稿にかかった。例の天竜川の与六一家を主題に、冲也があら筋を立てたもので、部分的にはふし付けもできているのを、三幕の台本にまとめようというのだ。ここへ移ってから七日間、二人は外へはいちども出ず、生田が書く側から冲也がいろいろ註文をつける、生田が尤もと思えばよし、さもないときは議論になるといったふうで、まだ第一幕も終ってはいなかった。

「いまちょっと思いましたが」と云って生田が筆を止め、冲也に振返った、「——あのときのごまのはい、金造とかいう名だったな、あの男はあれからどうした」

冲也はぼんやりと生田を見た。顔は蒼白く痩せ、眼は赤く濁っていて、生田のほうを見ているのに、生田を見ているような眼つきではなかった。

「知らないね」と冲也は答えた、「——大阪へ帰る途中、神崎川という川のところまで別れたままだ」

「それっきりか、宿はどこなんだ」

冲也はだるそうに首を振った。

「知らないのか、ひどいもんだな」と生田はあきれたように云った、「二度も危険を知らせてもらったのに、宿ぐらい訊いておく気になりそうなものじゃないか」

「彼のほうでおれの住居を知っているさ」

「それは結構なことでございますな」生田は皮肉にあいそ笑いをしてみせた、「用があればまた先方からいらっしゃる、おまえさんは下世話に通じているよ」

「どうしてあの男のことなんぞ云いだすんだ」

「この芝居に使えないかと考えたんだ、ひょっと思ひだしたんだがね、品川と箕面道、二度も同じ出来事が重なったというのは、事実でなければ絵そらごととしか思えない、それが現実にあつたとなると、奇遇きぐうというよりもなにか因果関係があるように感じられるじゃないか」

「金造もそんなようなことを云っていたよ」

「それでだね、この芝居の主役の与六」

「与六は本名だ、芝居では弥六となっている筈だろう」

「よろしい、その弥六が豪家の資産を使いはたすね、その相手の女に、ごまのはいの兄があることにするんだ、つまり金造という男が女のうしろにいて」

「だめだ」沖也は顔をしかめた、「そんなよけいな者は入れないんだ、筋はできるだけ単純でなければいけない、悪だ、まだとか善だ、まだとか、因果関係などを絡からませることは絶対に避けてくれ、これは平凡な人間たちの悲劇なんで、お芝居になってはいけないんだ」

「それはわかっているよ、しかしまあおれの考えも聞いてくれ」

生田半二郎は筆を置いて、自分の考案を話した。沖也は聞いているのかいないのか、角樽の酒を片口へ移し、それを爛徳利に注ぐと、冷のまま手酌で飲んだ。生田の話しが終わろうとしているとき、声をかけて襖ふすまをあけ、女中のおはるが顔を出した。座敷へはいろいろとはせず、顔だけ出して生田にめくばせをした。

「うるせえな」と生田が云った、「呼ばないときは来るなと云ったろう」

「お人がみえてます」とおはるが云った。

「人が来た、——おれにか」

「竹本座の方です」

生田はよしと頷^{うな}ずいて立ち、ちょっと人に会ってくると冲也に云って、おはるといっしょに出ていった。

「こうしてはいられない」冲也は独りでそっと呟^{つぶ}やいた。「おれはどうにかしなければならぬ」それからまたぼんやりとした顔つきで、どこかへゆかなければならぬ、と口の中で囁^{ささ}やいた。いつごろから始まったのか、自分でも記憶はないが、黙ってものを考えているとき、または人と話しをしていながら、ときどきふっと意識がよそへそれる。——どこか遠くで呼んでいる者があのようにも感じられるし、眼に見えないなにかの力が、自分をどこかへひきつけるような感じもあった。どちらにしろ、そこにいる自分は本当の自分ではなく、じつは遠いどこかに現実の自分がいる、といったような、おちつかない気分にとらわれるのだ。——それは一瞬間で終るときもあり、半刻あまり続くこともあって、その意識のそれているあいだは、いま話している相手の存在さえわからなくなるようであった。

生田半二郎が、見知らぬ男といっしょに戻り、竹本座の近松紋太であるときひきあわせた。紋太はおどろくほど長い顔で、顎^{あご}が長くしゃくれてい、人がふきげんなときするように、下唇の突き出た口をへ、の字なりにむすんでいた。年は二十五から三十のあいだで、古い小紋の着物に羽折^{はおり}をかさね、菖蒲^{しょうぶ}革^{がわ}の足袋^{たび}をはいているのが、眼をひいた。——もとは義太夫浄瑠璃^{じやうるり}をやっていたのだろう、作者部屋の者だというが、喉^{のど}のつぶれたような、韻の深いしゃがれ声で話した。

「いや、近松でも半二や徳叟^{とくそう}とは縁がありません」と紋太は云った、「人形浄瑠璃がすっかりさ

びれまして、誰も本気に身を入れてやる者がいなくなりました、このままでは人形芝居も亡んでしまいかもしれませんので、勝手に巢林子そうりんしの姓を借り、及ばずながら復興させてみたいと考えているのです」

云うまでもなく、巢林子は近松門左衛門の別号であって、冲也が早くから門左衛門に心酔していたこと、常磐津とぎわづをはじめたころからその浄瑠璃本を集め、心中物はすべて諳誦あんしやうできるほど詳しいこと、などを知っている生田半二郎は、必らず強い反応を示し、感動するにちがいないと思つた。けれども冲也はなんの感情もあらわさないし、紋太を見る眼つきもよそよしくつめたかつた。

「十日ばかりまえのことでしたか、わたくしは生田さんからあなたの話しをうかがい、由香利の雨という本も読ませてもらいました」と紋太は続けた、「生田さんはあれを人形芝居でやれないだろうか、と仰おつしゃったので、わたくしのまわりの者とも相談したところ、みんなたいそう乗り気になったのです」

冲也の眼が静かに生き返るように見えた。彼は紋太に頷うなづいて、生田半二郎のほうへ振向いた。「つまらない役者より人形のほうがいい、そう思つたんだ」と生田が云つた、「うまく当れば人形芝居のために役立つしね」

「費用はどのくらいかります」と冲也が訊いた。

「入費よりも問題はやれるかやれないかです」と紋太が答えた、「失礼ですがわたくしどもはあなたの浄瑠璃をまだ聞いていません、冲也ぶしで人形が使えるかどうか、まずそれから片づけてゆきたいんです」

「いいでしょう」冲也は頷ずいた、「そちらの都合のいいときに、いつでも聞いてもらいます」それで話しはきまり、近松紋太は帰っていった。

「当ると思えないな」冲也は紋太が去るとすぐに云った、「どうせこころみにやるのなら、由香利の雨でなくこんどの新らしい物にしたいがね」

「まだ本もできてないんだぜ」生田は冲也の前に坐り、自分の盃を取りながら云った、「ふし付けだってまだできあがってはいない、由香利の雨なら、よければすぐにでも稽古には入れるからな」
「あれはもう古いんだ、筋立てもあまいしふしもあまい、おれにはもう興味がなくなっているんだ」

「作者があまいと思うくらいで、見物にはちょうどいいのさ、いま評判になっている芝居をみてもわかるだろう、とにかく見物をひきつけることが先だよ」

冲也がふいと生田を見た、「いつ人形芝居なんぞへ話しをもつていったんだ」

「中藤が箕面へいった日さ」と生田は答えた、「人形芝居はまるつきりすたれたが、滅亡させたくないと思ってる者がいないわけじゃあない、植村ぶん榮という熱心な人があって、若い人形使いたちの面倒をみている、それを思いだしたから近松紋太に相談してみたんだ」

「しかし竹本座は義太夫ぶしだろう」

「そんなことはない、半太夫ぶしでも豊後ぶしでも興行した例はある、冲也ぶしならまず間違いなしだな」

「酌をしよう」と冲也が云った。

九の二

歴 遍 空 虚

数日のち、道頓堀どうとんぼりに近い植村ぶん樂の家で、冲也は「由香利の雨」の全曲をうたった。集まった人形使いは六人、近松紋太が世話役で、ぶん樂もその席につらなつた。むろんひき語りであり、馴れない三味線で調子がよく出なかつたけれども、それは集まった人たちに感動を与え、立役とおやまをやる人形使いの三人は、すぐにでも稽古を始めたいと云つた。主人のぶん樂も氣にいったようすで、家人に酒の支度を命じたが、生田半二郎はそれを辞退し、冲也を促うなががしていとまを告げた。

「どうしたんだ、急に」外へ出ると冲也が訝いぶかしそうに問いかけた、「まだ話すことが残つてたんだぜ」

「酒はだめだ」と生田は首を振つた、「おまえさんは酔うと平気で毒ぐちをきく、せっかく纏まとまるものをぶち毀したくはないからな」

「おれがそんなに酒癖がわるいか」

「二人で一杯やろう」と生田が云つた、「おれなら馴れてるから、どんな毒舌でも拝聴するよ、今日は祝つてもいい日だからな」

冲也はうれしそうに頬笑んだ。こつちで再会して以来、初めて見る微笑であるが、江戸にいたときのような明るさはなく、どこかにかげのある疲れたような色が感じられた。道頓堀で飲みだし、日の昏くれるまでに三軒まわり、それから芝居町の付近を避けて、生玉神社いくたまのほうへいった。

人形芝居がうまくゆきそうだということ、沖也は久方ぶりに希望がわいてきたらしく、かなり酔ってからまきげんがよく、しきりに浄瑠璃の話しを続けた。

「少しおちつけよ」と生田はしばしば制止した、「そう気ばかりあせったってしょうがない、これは一生の仕事なんだろう、もっと腰を据えてやろうじゃないか」

「おれはあせってはいない、あせってできるような仕事じゃあない」と沖也は云った、「けれどもそうおちついてもいられないんだ、おれの浄瑠璃にはまだなにかが欠けている、やりたい仕事はあとにつかえているし、沖也ぶしの芯がきまっていけない、早く舞台にかけて効果を慥かめないうちには、いまかかっている仕事だつてめどがつけにくいんだ」

「わかった、しかし今夜だけはこれで話しを変えよう」生田は沖也に酌をしてやりながら、強引に話題をそらした、「——そこでひとつ、正直なところを聞きたいんだが、おけいさんとはいまでもなんでもないのか」

沖也は不審そうな眼で、生田半二郎をみつめながら、ゆっくりと酒を啜った。

「なんでもないかとは、どういうことだ」

「言葉どおりさ、まえにもいちど話したことがあるだろう」

「ああ、そのことか」と沖也は無関心に云った、「そのことなら、まえに話したとおりさ」

「それで平気なのか、おけいさんは縹緞もよし気だてもやさしい、なによりもしんから中藤のためにつくしている、そうだろう」

「わかりきったことをなぞるな」

「そういう人といっしょに旅をし」

「同じ部屋で寝てか、——それもまえに話したことだぜ」

「正直に云って、おまえさんはあの人をどうする気なんだ」と生田はしんけんに訊いた、「江戸からこんな大阪くんだりまで付いて来て、苦勞もいとわず面倒をみるのはだて、や酔興じゃあない筈だ、女がそこまでじつをつくすのは、しんそこ惚れていればこそ、とは思わないか」

「思わないね」冲也はあっさり首を振った、「思わない理由も話したぜ」

「陰膳のことなら聞いた」

「いまでも陰膳は欠かしたことがないよ、いや、ちょっと待った」冲也は生田の云おうとする言葉^{言葉}を遮ぎった、「このまえ生田は、おけい^{おけい}が陰膳を据えるのは嫉妬^{しと}の裏返しだ、というようにことを云った、本心はおれにやめろと云わせるためだとかね、しかし違うんだ、もしもおけい^{おけい}にそんな氣持があれば、おれだって男だから感じない筈はない、しょっちゅう顔を合せていて、めし^{めし}もいっしょに喰べ、寢床を並べて寝るんだ、どっちかにこれっぽっちでもいろけがあれば、とっくになんとかなっているよ」

生田半二郎は舌打ちをし、はらでも立てたように酒を飲んだ。

「こんな関係は青っ臭いかもしれない」と冲也は続けた、「生田から見ればうんざりするかもしれないが、こんな男と女があるという事実はどうしようもないだろう」

「中藤にはわかっていないんだ」生田は独り言のように云った、「いろいろというものは、男からくどきかけるものだ、心の底では惚れていても、女によってはそぶりにあわせない、たいていは嫌いなようなふりさえするものなんだ、——尤もおれのおつね^{おつね}のような女もいることはいるが、あんなのは珍らしいだろう、たいていは男からくどかれて初めて、心の底に隠れていた氣

持が動きだすんだ」

こんどは冲也がはらを立てたように、そっぽを向いて酒を啜った。

「たしかに、芸は芸で大切だ」と生田はちよつとまをおいて続けた、「——中藤にはお京さんという妻もあるし、生涯を賭けても悔のない冲也ぶしという男がある、だが、おけいさんにはなにがあるんだ、冲也ぶしは間違いなく、天下の冲也ぶしにた たらうし、そして中藤はいつかはお京さんのところへ帰ってゆくだろう、そのときおけいという人はどうなるんだ、おけいさんの手になにか残るものがあるのか」

生田半二郎は持っていた盃を、手荒くつけ板の上へ置いた。その音が高くひびき、すぐに脇のほうで客の一人がうたいた。冲也はそれまで啜るように飲んでいたが、しだいに飲みかたが早くなり、顔が蒼ざめてきた。

「どうやらまた」と冲也が囁やくように云った、「おれを殴りたくなったらしいな」

「うぬぼれるな」と生田が答えた、「おれは尊敬できない人間を殴るほどぼけやあしねえよ」

「おれが尊敬できないと云うのか」

「ああ、芸のために人間を利用するようなやつは尊敬しないね、どんなにずばぬけた芸だって芸は芸さ」生田は手酌で酒を注いだ、酒の大半は盃の外へこぼれた、「——たかが浄瑠璃ぐらいのために、女ひとりの一生をむだにさせるようなやつは大嫌いだ、そんなやつはつらも見たかあねえや」

冲也は齒をみせて笑った、「おい、毒舌を拝聴すると云ったのはどっちだ」

「おれはおけいさんが可哀そうなんだ」

それならおけいを取れ、と云おうとしたが、口には出さずに冲也は酒を呷った。

「夜あがりは続かぬものよ 朝の雨」とさっきの客がまたうたいだした、「——二枚屏風をひきよせて、寒さをしのぐ肌と肌」

「いいな」と生田が囁やいた、「夜あがり、おまえさんの端唄だぜ」

「出よう」と冲也は盃を置いた。

「どうして」

「自分の唄だけはがまんがならない、自分の作った端唄を聞くと、おれは死にたくなってしまった」冲也は財布をそこへ置いて立ちあがった、「——これで勘定をたのむ」

そして逃げるように外へ出ていった。

酔いだしたのはそのあとすぐで、なお二三軒まわったことや、生田が諄く悪口を云い、自分も癪がたかぶってきて、生田を辛辣にやりこめたこと、また生田が飽きずに、おけいさんが哀れた、と繰り返していたことなどは覚えているが、そのほかのこまかい経過は記憶がなかった。体が疲れきっていて、喉がひどく渇くのに、水を飲む気力もなく、寝返りさえもできないでいると、誰かが肩へ手をかけてやり起こした。

「あのう、もし、もし」と女の声が云った、「そんなに眠ってばかりいたらあかんげの、もし、お客さんどうなさるんかの」

へんな訛りだな、と冲也は思った。大阪弁でもない、語尾があがって長くのび、押しつけるような調子に聞える。どうしたんだ、おれはどこにいるんだ、と半ば眠りからさめながら冲也は思った。